
湾の竜騎兵

雨宮雨彦

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

湾の竜騎兵

【コード】

N0645D

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

海底で次々に起こるケーブル切断事件には、海軍も神経をとがらせていた。だから私にも、ケーブルを警備せよとの命令がくだったのだ。相棒のクジラを連れ、私は夜の海へと潜っていった。

まず知っておいてほしいのは、海中の風景は美しくもなんともないということだ。多くの人はこの点を誤解している。水は太陽光線を吸収するから、ある深さを過ぎると真っ暗なばかりで何も見えず、自分の指先を見分けることさえできないほどのだ。

その暗闇の中でも、クジラは物の形を知ることができる。聴力がとてもよく発達していて、まわりの地形や仲間の群れ、敵の姿などを、音だけで的確に見分けることができるのだ。

だから海軍は、竜騎兵を出撃させるにあたって、昼間であるか夜であるかということに気を配る必要はまったくなかった。私はまだ訓練生にすぎず、実戦に参加したことは一度もなかった。だがあの海底ケーブルの警備には、私も駆り出されることになった。

海底ケーブルというのは、海の底を走っている電線のことだ。電線といっても直径は30センチもあり、海底をだらりとはっている。ヒトリ湾を横断する形で、何十キロにもわたって敷設ふせつされている。

用途はただの電話線ではないが、国の東西を結ぶそれなりに重要なものであることは間違いない。だから、これが切断されてしまうという現象が半年間に2回も続けて起こってしまうと、政府も本気で対策を考えなくてはならなくなった。

切断されたケーブルはもちろん引き上げられ、調査がされたが、バーナーのような高熱を発するもので焼き切られた跡があり、どう見ても人間のしわざとしか思えなかった。

犯人がどこの誰であるにしろ、このまま放置して3回目の破壊工
作が行われてはかなわない。政府はケーブルの警備を海軍に命じ、
その役目が竜騎兵部隊にまわってきたのだ。だが海底ケーブルは長
く、そう簡単に見張れるものではない。正規の竜騎兵だけではもち
ろん足りず、訓練生まで投入されることになったのだ。

命令を受け、教官から海図を手渡されて、私はプールへ急いだ。
足音を聞きつけ、チビ介はもう待ちかまえていた。身体を斜めにし
て、片方の目を水面に出している。

チビ介は私に与えられたクジラで、身体ばかり大きいはまだ子供
のマッコウクジラだった。下級生に手伝わせて、私が潜水服を身に
つける様子を水の中から眺めていた。

潜水服の準備がすむと、チビ介は待ちかねたというように私のそ
ばへやってきて、ごろりと仰向けになって、おなかを見せた。手を
伸ばしてなでてやると、キキキと楽しそうに鳴いた。

潜水服から伸びている空気パイプを、私はチビ介の背中に取り付
けてある接続装置にカチンとつないだ。この装置は呼吸口を通して、
クジラの肺の奥へとつながっている。こうやってクジラから空気の
補給を受けて、竜騎兵は海中で活動するのだ。

水門が開くのを待ち、チビ介と私は出かけた。楽団や見送りの人
々がいるわけでもなく、出撃といっても静かなものだった。時刻は
午後8時過ぎで、ついさつき日が暮れたばかりだ。

ケーブルの切断が誰のしわざだとしても、真昼間から仕事をする
ほどバカな犯人ではないだろう。私とチビ介はこれから明日の朝ま
で、あてもなくケーブルにそって泳ぎ続けるのだ。犯人を捕まえな

いまでも、何かを目撃できることを期待しての作戦だったが、成果が得られると思っっているのは、海軍を上から下まで探しても一人もいなかったに違いない。

水門をぬけるとすぐに海だが、ライトをつけた警備艇がいて、私たちを先導してくれた。警備艇の明かりについていくようにとチビ介に指示を出し、私は一眠りすることにした。

やわらかな肌に触れ、潜水服の手袋ごしにクジラに合図を送るのだ。チビ介は私に触れることが好きで、何かの合図を送るたびに目を細めたが、指示にそむいたり、意味を取り違えて勝手な行動をとったりしたことは一度もなかった。そういう意味では、とても扱いやすいクジラだった。

目的の場所に着いたのは、1時間ほどたったときのことだった。胸ビレの前にわたされているベルトにつかまって眠っていたのだが、チビ介はそつと身体をゆすって起こしてくれた。目を開くと、アクセルを戻して、警備艇が減速を始めたところだった。

艇長が振り返り、こちらを眺めているのが見える。身体を伸ばして手を振り、私は合図を送った。それからチビ介に指示を出し、潜水が始まった。

マッコウクジラ独特のやり方だが、身体を垂直に立てて、石ころが沈むようにまっすぐ潜水してゆくのがチビ介は好きだった。いくらも行かないうちに、波の向こうの警備艇の明かりはゆらゆらと暗くなり、やがて何も見えなくなった。チビ介は自信のある様子で降下を続けている。

私たちのすぐそばにはブイがあり、波間にただよって浮かんでい

るものだが、その下部からは長いクサリがずっと伸びていて、海底ケーブルにまで達している。私たちはそれをたどっていたのだ。

懐中電灯をつけ、私は深度計を確かめた。180、150。すぐに300メートルを越えた。もう潜水艦ですらやってくることのできない深さだ。

350メートルをすぎたところで、チビ介が降下速度をゆるめるのが感じられた。もうすぐ海底なのだろう。深度計を眺めていると、400に少し足りないところで針が止まり、懐中電灯の光の中に海底の様子が浮かび上がり始めた。

このあたりの水はとてもよく透き通っていたが、それでもどこまでも見渡せるというわけではなかった。見えているのはせいぜい50メートル以内だけで、それをすぎるとぼんやりとした灰色の中へ溶け込んでしまい、その先はそれこそインクのような真っ暗闇になってしまう。

ヒレの動きを止め、チビ介は立ち止まった。目の前にはケーブルの姿が見えている。海底に無造作にドスンと置かれている。だらんと横たわっている長いヘビのような姿だ。世の中にこれほど退屈な存在はないのではないかという気がした。

それでも仕事は仕事だ。手を伸ばして胸ヒレに軽く触れ、私はチビ介の向きを変えさせた。ここからは、ずっと東に向かってケーブルをたどってゆくのだ。岩と砂と海藻と、ときどきは魚の姿を見かけるだけの退屈な仕事になるだろう。私はため息が出そうになった。指示を出すと、背筋をピンと伸ばし、チビ介はケーブルにそって進み始めた。

だがこれは、思うほど退屈な仕事にはならないのかもしれないのかもしれなかった。私はすぐに奇妙なものを目にしたのだ。

それが何なのか、最初はよくわからなかった。海底は平らで、まるで砂漠のようにどこまでも砂地が続いている。そこに突然、おかしなものが混じるようになったのだ。大きさは1メートル近くある中心にある小さな胴体から、5本の足が水道のホースのように長くクネクネと伸びている。懐中電灯を向けてしげしげと眺めて、やっとヒトデだと気がついた。

もちろん生きていて、足をさかんに動かしている。それが一匹や二匹ではなく何千匹もいて、砂原をいちめんにおおいつくしているのだ。それほど珍しい種類ではなかったが、こんなにたくさん集まっているのは見たことがなかったし、話に聞いたこともなかった。

私は鼓動が速くなっていったが、恐怖を感じていたのではないと思う。ヒトデたちから10メートルも離れていない場所を、チビ介は平気な顔で泳ぎ続けている。彼が危険を感じていないのであれば、あまり気にする必要のない出来事なのだろう。

それどころかチビ介は突然進路を変え、ヒトデの一匹を口にくわえたではないか。まずかったのか、すぐにペツとはき出したが、なんでもない顔でケーブルにそうコースに戻り、泳ぎ続けた。

予備の懐中電灯も取り出し、私はもう一度眺め渡した。光の届くかぎりヒトデの姿を見ることができた。足を動かし、すべてのヒトデが同じ方向へ進んでいることに気がついた。まるで巨大な軍隊が行進しているかのような眺めだ。

ヒトデたちは西へ向かっていた。何のためにどこへ行くのか、ど

ここからやってきたのかはわからなかった。だがとにかく、私たちとは逆の方向だ。

数キロ進むとヒトデたちは姿を消し、海底はまた砂漠のような砂だけの風景に戻った。ほつと息をついたが、不安ではなかったと言えバウソになる。もしあのヒトデたちが何かから集団で逃げ出してきたのだとすれば、チビ介と私はその何かに向かって進んでいくことになるのではないか？

わずかだが海底が斜めになり始めていることに気がついたのは、もう少し進んでからだだった。よく見ないとわからないほどだったが、たしかに上り坂になっている。懐中電灯を向けて再び眺め渡したが、たまたませまい一カ所がそうになっているというのではなく、本当に海底全体がゆるい登りの斜面になっている様子だ。

海図にはそんなことは描かれていないので少し混乱したが、事実そうなのだから仕方がない。その坂にそって、ケーブルもゆつくりと登ってゆく。私たちはそのまま前進を続けるしかなかった。

海図を眺め直したが、やはり私には理解できなかった。何度見ても、このあたりの海底はずっと平らであるように描かれている。海図の製作者たちは、こんなに巨大な斜面を見落としたのだろうか。何世紀も前から数え切れないほどの船が行き来し、先端に重りをつけたロープをたらし深さを測ってきた海だ。そんな初歩的なミスがあるとは、とても信じることができなかった。

進み続けると海底はさらに持ち上がってゆき、思いついて深度計を見ると、すでに針は300メートルをさしていた。いつの間にか

100メートル近くも上昇していたのだ。居心地が悪そうに、チビ介が身じろぎをしたことに気がついた。身体全体をわずかにふるわせたのだ。

ほんのささいなしぐさだったが、なぜか気になり、私は足を止めさせた。胸ビレを広げ、チビ介はブレーキをかけた。私たちは海中に静止することになった。目の下には海底が広がっている。あたりは真っ暗で、私の懐中電灯以外には何の光もないはずだったのだが…

なにげなく下を向いて、私はやっと気がついた。よく見ないとわからないほどかすかなものではあるが、海底が光を発していたのだ。まるでクモの巣のような眺めだった。海底をいくつもの線が走り、いくつかは交差し、いくつかは交差することなく、あちこち好きな方向へ、いなづまのようにギザギザしながら伸びているのだ。それらの線が暗いオレンジ色に輝いているのだ。

もちろん非常にかすかな輝き、ごく弱い光でしかないのだろう。だがここは夜の海中なのだ。光など他にまつたくない場所だ。だから、あれほど弱い光でも目に入ってくるのだろう。

交差する線たちが何かに似ていると私は思った。そして、それがガラスの表面を走るヒビの形だと気づくには時間はかからなかった。つまり、海底に無数のヒビが入り始めているということなのだ。そのヒビがあを光を発し、オレンジ色に輝いているのだ。

あれは溶岩の色だと、やっと私は気がついた。地の底にあり、高温でどろどろに溶けている岩だ。そうやって液体のようになっていく。だからきつと、何千度という温度なのだろう。それがああやって光っているのだ。

海底にヒビが入り、そこから溶岩が露出しかかっているのだ。あたりの海水温は100度をはるかに超え、一部は沸騰ふっとうしているに違いない。溶岩の成分が溶け込んで、酸のようにもなっているかもしれない。

こうなると、ケーブルの切断はもうミステリーでも何でもなかった。溶岩にさらされれば、ケーブルであろうが何であろうが、簡単に焼き切れてしまうだろう。ヒトデたちだって、引越す気になるに違いない。

オレンジ色の絵具で子供がなぐりがきしたかのような風景を見下ろしながら、私たちは水中に浮かんでいた。眼下に広がるのは、美しいといえば美しい光景だった。

だが突然、私はもう一つのミステリーのことを思い出した。海底がいつの間にか盛り上がり、斜面になっている件だ。海図には、このあたりの海底はずっと平らであるように描かれている。

意味に気がついて、ヘルメットの中で私はあつと声を上げた。チビ介が私をちらりと振り返った。考えをまとめるため、私はツメをかもつとしたが、ガラスが邪魔で指が口に届かないことに気がついた。

海底は、ただ上り坂に変化したわけではないのだ。大きすぎて、私の目には一部分しか見えていないのに違いないが、実は全体が山のように盛り上がり始めているのだ。その斜面の一部だけを見て、私は海底が斜めになっていると思っていたのだ。

おそらく真実は、この湾の中心に山ができようとしているという

ことなのだろう。だから海底がヒビ割れ、上昇し、溶岩が顔を出しつつある。そうやってできつつあるのは、きっと火山だろう。

ヒトリ湾の中心に火山ができる？

私は、頭がくらくらしてくるような気持ちになった。ヒトリ湾は波が穏やかで航海しやすく、魚も多い豊かな海だ。それが酸と火の海に変化しようとしているのだ。

一秒でも早く、このことを通報しなくてはならないと思った。もし噴火が始まったら、大変なことになる。地震や津波が起こり、沿岸をおそうかもしれない。

胸ビレに触れて合図を送り、私はチビ介を浮上させようとした。波の上に出て、信号ピストルを使って警備艇を呼ぶのだ。警備艇にはもちろん無線機が積まれている。

だが私は、水中で長く考えことを続けすぎたようだった。その間に時間切れが迫っていたのだろう。私とチビ介の真下で、噴火が始まるうとしていた。

最初にやってきたのは音だった。まるで爆発する火薬のようで、誰が水の中で大砲を鳴らしているのだろうという気がした。キョロキョロして音源を探そうとしたが、よくわからなかった。私たちを取り囲むように、まわり中から聞こえてくるようだったのだ。

その音と調子を合わせるようにして、身体を締め付ける強い衝撃を感じる。海底のあちこちで白い小さな光がきらめくのを見ること

もできる。まるでいくつもの火花が仕かけてあり、間をおいて一つずつ点火しているかのような眺めだ。

ドンドンという砲撃のような音は、何秒かおきにまだ聞こえていた。あれは普通の音ではなく、水中を伝わってくる衝撃波だと、やっと気がつくことができた。だが次の瞬間、目の前に突然柱のような物が出現したので、私はとても驚き、息もできないほどだった。直径が十メートルほどもある巨大なもので、海底からまっすぐに立ち上がり、水面へ向けてずんずん伸び、暗闇の中へ消えている。

目を大きく開き、私は見つめた。それが本当は柱でも何でもなく、海底から噴き出してくる泥水にすぎないことに気づくには時間はかからなかった。溶岩の成分が溶け込んで、海水がどす黒く変色しているのだろう。高温でもあるから軽くなり、水面へむかつて勢いよく立ち昇り、あのような柱に似た姿に見えるのだろう。

チビ介は明らかにおびえ、身体をふるわせ始めている。だがそれは私も同じだった。黒い熱水の柱は一本だけではなく、あっと気がついたときには何十本も立ち昇っており、まるで森のように私たちを取り囲んでいたのだ。それを下からオレンジ色の溶岩が照らし出している。

ドンドンという音は、さらに大きくなっていく。熱水の柱だけでなく、海底のあちこちから透明な泡までが立ち昇り始めている。何かの火山性ガスだろう。あせりを感じ、私は水面を見上げようとした。

遠すぎて、もちろん水面を見ることはできなかった。熱水の柱と泡はずっと立ち昇り、暗闇の中へと消えている。水面はあの先にあるのだろうか。

私たちは噴火のまつただ中に放り込まれているのだった。キヨロキヨロして脱出路を探したが、どっちを向いても見あたらなかった。熱水の柱はそれほど数が多く、たがいに近く、しかもからみ合いながら交差していて、すきまをチビ介が通り抜けるのは、とても不可能に思えた。私たちは、熱水とガスの牢獄ろうごくに閉じ込められてしまっているのだった。

オレンジ色の輝きは、急速に強さを増しているようだ。それに照らされて、海底が明らかに山の形に盛り上がっているのを見て取ることが出来る。山頂はとがり、地中にあつた岩が割れ、真新しい断面を見せている。

ひととき大きな爆発音が聞こえ、私の身体はズンとゆさぶられた。チビ介の身体ですら衝撃でふるえたほどだ。火山の頂上がくずれ、巨大な溶岩のかたまりが姿をあらわすのが見えた。もちろんすぐに水に触れ、大量の水蒸気が発生し、透明な泡になって水面へむかって立ち昇っていった。オレンジ色の光を受けて輝き、夢のように美しいが、手を触れることができないほどの高温であるのは間違いないだろう。

不意に思いついて、私は海図をのぞき込んだ。溶岩の輝きで、もはや懐中電灯すら必要なかった。海図に目を走らせ、目的のものを見つけ出そうとした。

ヒトリ湾は、竜騎兵部隊が日ごろから訓練に使っている場所だった。もちろん広すぎて、湾内の地形をすべて覚えることなどできない。だが特徴のある部分なら、ほっておいても自然に記憶してしまう。私は、一年ほど前に受けた訓練のことを思い出していた。目的のものを、海図の上に見つけ出すことができた。

作戦と呼ぶには、いささかお粗末そまつだったかもしれない。だが他にやりようがなかったのだ。方位磁石をにらみ、私は方向を確かめた。目をこらし、遠くを見透かそうとした。

しかしだめだった。熱水の柱が邪魔をしている。合図を送り、私はチビ介をゆつくりと前進させた。

それでもまだ見えない。だが少し潜ると、遠くに見つけることができた。たしかにあれだ。マストの形に見覚えがある。

竜騎兵たちの間では、『谷たにし知らせの沈没船』と呼ばれていた。私が生まれるよりもずっと以前に沈んだ船だったが、まだくちはててはおらず、今でも形を残していた。船体が大きく裂けているわけでもなく、そつと置かれたかのように海底に座り込んでいる。

それだけではただの沈没船だが、『谷知らせ』と呼ばれるのには理由があった。あの船のすぐ向こうから深い谷が始まり、海底を切り裂きながら南へむかって長く走っているのだ。

何千年も前の大地震のときにできた谷だろうと学者たちは推定していたが、私にはそんなことはどうでもよかった。火山は、その『谷知らせの沈没船』のすぐ隣に口を開けていたのだ。あの沈没船のところまで行くことができれば、背後は深い谷だ。谷底を突っ走れば、熱水に出会うことなく火山から離れることができるかもしれない。

しかし、どうやってあの船のところまで行く？

熱い水は軽くなる。ならば逆に、冷たい水は重く、海底付近に集

まるということではないか？

勘違いをすることがないようにゆっくりと指を動かし、私はチビ介に指示を出した。

『海底にそつて、できるだけ深く泳げ』

念のために同じ指示をもう一度繰り返した。最後にポンとほおをたたいてやった。おびえた表情を隠さないままだったが、チビ介は海底へ向けて降下を始めた。

垂直に降下を続け、最後に90度曲がり、本当に指示通り、チビ介は海底から2メートルもないところを泳ぎ始めた。気になって私も水温計をチラチラと見ていたが、もちろん溶岩からはできるだけ距離をとって進んだのだが、水温はほとんど正常といってよいレベルでしかなかった。

折れ曲がった溶岩の流れにそつて何度も方向を変えながら、私たちは沈没船へと近づいていった。オレンジ色の光を受けて、海中に四角く浮かび上がっている。

もともと四角い船ではあった。戦争中にヒトリ海軍が大量生産した貨物船の一隻だったのだ。特長も何もない安物の船だが、このときの私には、投げキスをしたいぐらいすばらしい相手に思えた。

船体は見る見る大きくなってくる。鉄板の表面はサビにおおわれ、デッキの上には驚くほど大きく育った海草が森を作っている。それほど長い間水中にあるということなのだろう。

私たちは船のそばを通りぬけることができた。とたんにその影から、今までは見えていなかった別のオレンジ色の割れ目が顔を出し

て驚いたのだが、十分離れているので危険はないとわかり、ほつとすることができた。海底の谷は、船をすぎて200メートルも行かないところから口を開けていた。

谷の入口を越え、谷底へ向けて降下を始めると、オレンジ色の光がさえぎられ、とたんに暗くなった。もう溶岩など気配も感じられなかった。

それほど深い谷ではなかった。せいぜい100か150メートルだろう。すぐに降下をやめ、チビ介は水平に泳ぎ始めた。全速力を出している。首を曲げて私は見上げたが、谷の両側の黒い崖以外は何も目に入らなかった。

私たちは、何とかぎりぎりで間に合うことができたようだった。谷に入ってまだいくらかもたつていないときだったが、突然強い衝撃におそわれたのだ。本当に大きな衝撃で、まるで耳のそばで大砲をぶつ放されたかのようなだった。私は振り落とされてしまい、チビ介もバランスを失い、海底に衝突しかけたほどだ。

もちろん、この瞬間に火山が爆発したのだ。溶岩を今までなんとか押さえつけていた岩盤が大きく口を開き、吹き飛ばされてしまったのだ。溶岩が広い面積で露出し、水蒸気が爆発し、さらに破壊を大きくした。

波と衝撃は水中を走り、私たちのまわりでもいくつか崖くずれが起こったほどだ。火山のすぐ近くではどのようなことが起こったのか、想像もつかない。

だが私たちは、すでに数キロメートル離れたところにいたのだ。クサリを引き寄せて私はベルトにつかまりなおし、チビ介も安定を

取り戻して、泳ぎ続けることができた。水面では波が荒れ狂っていたに違いないが、谷底は静かだった。私たちは距離をかせぎ、十分安全だと思えるところまできてから、浮上を始めた。

バシユツと大きな音を立てて息をはき出しながら水面に背中を出し、チビ介は深呼吸を始めた。ヒレをすべて止め、いかにもほつとしたという表情だ。

水温計を見たが、水には不自然な暖かさはほとんど感じられなかった。思わずニコニコして、私はチビ介の肌をなでてやった。だが反応はなく、チビ介はひたすら息を吸い続けている。私は、かなり無理をさせてしまったのだろう。

チビ介が再び目玉を動かして私を見たのは、もう少したってからだった。胸ビレを差し出すので、ぽんぽんとたたいてやった。

身体を動かす気にならず、しばらくの間水面をただよい続けた。振り返ると火山は水蒸気とガスを空高く噴き上げているが、本当は白色をしているはずの水蒸気が、水中からの光を受けてわずかにオレンジ色がかって見える。シュウシュウという音がここまで聞こえてくる。さらに一、二度爆発があり、黒い岩のカケラが波の上に飛び散るのも目に入った。鮮やかな白い光が、フラッシュをたいているかのようにあちこちで光る。

ため息でもつくようにチビ介が大きく息をはいたので、私もつられて笑ってしまった。

この場を離れたがっているように見えたので、私はベルトにつかまることにした。さっそくヒレを動かして、チビ介は泳ぎ始めた。もちろん火山からは遠ざかっていくのだが、水面に行くように指示を

出し、私は振り返って、噴火の様子を眺め続けた。

信号ピストルを使って警備艇を呼ぶことも思いついたが、やめておいた。噴火している火山のそばでは、信号弾などいくら撃つても気づいてもらえないだろう。あわてなくても、噴火についてはすでに司令部に通報がされていることだろう。私たちは火山をさけて、ゆっくりと戻ればいい。

しかし陸地へ戻るといつても、口でいうほど簡単な仕事ではなかった。火山に触れて熱くなった水が海流に流され、こちらへ押し寄せてくる可能性があったのだ。それをさけるために、私たちはかなりの遠回りを強いられることになった。

海図を眺め、海流の様子を調べたが、安全と思われるルートはとてつもない大まわりになり、帰りつくのに数時間かかってしまいうだった。だが選択の余地はなかった。方位磁石をたしかめ、私はチビ介に方向を指示した。

あれだけ大変な目にあわせてしまったのだから、無理を言っ、速く泳がせる気にはならなかった。水面の少し下をゆっくりと行かせ、私はときどき水温計に目を走らせたが、異常は感じられなかった。

とうとう夜が明けはじめた。休憩するために水面に浮上し、もう一度海図を眺めることにした。

私たちは、陸地から数十キロ離れた場所にいた。振り返ってももう火山の煙は遠く小さく、無害な入道雲のようにしか見えなかった。思わずため息が出たが、海図の上にある物を見つけて、あつと声が出た。知らない間に、私たちは『岩山の機雷船』のすぐそばにまできてしまっていたのだ。

機雷というのは戦争で用いる爆弾の一種で、ボールのように丸い形をして、風船のように海中をふわふわとただよっている。下部にはクサリがあり、これで海底からつながれているのだ。敵船が接触

するとドカンと爆発し、撃沈することができる。

機雷船とはこれを敷設^{ふせつ}する船のことで、あちこちの海域に設置してまわる作業に使われる。前の戦争のときにも用いられていたが、敷設作業の最中に一隻が敵潜水艦に発見され、魚雷を二発くらって沈没してしまった。そうやって横たわったのが岩だらけの海底の丘の上だったので、この沈没船にはそういう名がついたのだった。竜騎兵の間ではよく知られていて、まだ見たことはなかったが、私も噂で聞かされてはいた。

おもしろいのは、沈没したときにちょうど敷設中だった機雷が1個、まだクサリでつながれたままになっているということだった。クサリは、沈んだ船の甲板からまっすぐ上を向いて伸び、その先には機雷がくっついたままになっている。

もちろんこの機雷はまだ生きていた。戦争が終わって何年もたっているのに、船が接触すれば今でも爆発することだろう。だが深さ100メートルの海中なのだ。誰も気にしてはいなかった。商船はもちろん、味方の潜水艦航路からも遠く離れていた。

チビ介に合図を送り、私は機雷船へ向かって針路をとらせた。ここまで来てしまったのだ。ちよつと見物していこう。

機雷船はすぐに見つけることができた。朝日を受け、海底に影を落としている。だが、おかしなことに気がついた。船体が横倒しになっているのだ。

そつと置かれたかのように、機雷船はまっすぐに立っていると私は聞かされていた。それが今は右側を下に、なぜか横向きになっているのだ。サビにつつまれた船体はもろく、大きな裂け目がいくつ

もできている。

チビ介の足を止めて眺め、もう一つおかしなことに気がついた。機雷の姿がないのだ。クサリにつながれ、まるで風船のようにまっすぐ水面へむかって伸びているはずだった。だが影も形もない。

合図を送り、私はチビ介を船に接近させた。船腹に入っている裂け目はまだ新しく、できたばかりであるかのように見えることが気がついた。海草やサンゴの生え方でわかるのだ。目の前にある断面は鉄が露出し、海草などカケラもない。

甲板へ近寄り、私は機雷のクサリを探した。これはすぐに見つけることができた。半分ほどにちぎれ、海底にだらりと横たわっていた。クサリの断面を確かめると、これも真新しかった。

振り返ってチビ介の目を見つめ、私は考えをまとめようとした。だが、考えられる可能性は一つしかなかった。

戦争中から沈んでいるのだから、船はさび付き、もろくなつていに違いない。距離があるとはいえ、そこへ海底火山が爆発したのだ。強い衝撃が海中を走り、船体を押し倒したのだろう。同時に、機雷をつないでいたクサリも切れてしまったのだ。波に押されてふわふわと、機雷は海中をただよっていたことだろう。クサリを失って軽くなり、今は水面近くに浮いているに違いない。

はつとして時計を見た。火山の爆発から何時間たっているのだろう。海図には海流のほしいの速さも記入されていた。流されていた方向も見当がつく。チビ介に指示を出し、私は機雷を追いかけ始めた。

神経を使うが、変化のない仕事になった。私たちは海流に乗り、スピードを出した。

何分かおきに立ち止まり、海流の方向を確かめた。自分のいる場所を海図の上に記入していったのだが、だんだんと航路に近づきつつあることに気がついて、あせりを感じないではいられなかった。

この国の首都はヒトリ湾に面していて、大きな港もある。出入りする船舶も多い。一日に百隻は軽く越えているだろう。それらの船が利用する航路へむかって、機雷は流されていきつつあったのだ。私と同じように疲れ切っているに違いなかったが、チビ介をせかして、スピードを上げさせるしかなかった。

チビ介はよく言うことを聞き、たまたま見かけたイカをつかまえてほお張り、そのあと2時間ほど眠った以外は、ずっと泳ぎ続けた。私もくたくただったが、機雷をほっておくわけにはいかなかった。

機雷を見つけることができたのは、ほんの偶然からだ。水面に浮かび上がって何度目かの休憩を取っているときだったが、青い空に鳥の群れがいるのが目に入った。低い空にとどまり、ぐるぐる旋回しながら、しきりに水面を気にしている様子だ。チビ介に合図を送り、すぐにそこへ向かわせた。

するとそこにあつたのだ。直径数メートルある金属製の球で、まっかにさびた表面はデコボコになっているが、敵船に触れたときに点火するための棒状の装置が何本も突き出しているのが見える。ちぎれたクサリの残りが下部に数メートル、まだぶら下がっている。

そういう姿がきつと、大型のクラゲのように見えたのだろう。日影を求めて小魚がその下に集まり、群れを作っているのだ。海鳥たちはそれを目当てに集まっていたのだろう。

小魚たちは平気な顔をしているが、私は近寄りたいとは思わなかった。チビ介の足を止めさせ、眺めていた。波が穏やかなので、機雷はゆっくりと上下に揺れている。いかにも平和そうな風景だ。だがそうしながらも、海流に乗って運ばれているのだ。

水兵のはしくれだから、私も機雷の型は見分けることができた。これは装甲の分厚い戦艦を沈めるために作られた強力なもので、一般の客船や商船ではひとたまりもないだろう。

水平線のかなたにいつ船が姿を見せても不思議はない状態だったのだが、私は決心がつかず、だらだらと考え続けた。しかしとうとう心を決め、ヘルメットのネジをゆるめ始めた。

水中でヘルメットをはずすと、泡がぶくぶくと大きく立ち昇った。私は潜水服からぬけ出し、身軽になつてチビ介の背中に取り付いた。空気パイプを接続装置から引き抜いた。クサリをはずすと、まだ内部に残っていた泡を引きずりながら、潜水服は海底へ向かってゆっくりと沈んでいった。

クサリを手に取り、チビ介を水面まで行かせ、自分もときどき水上に顔を出して息を吸いながら、私は作業を続けた。予備のクサリも持ってきてつなぎ、長さを二倍にした。チビ介は離れたところで待たせておいて、クサリのはしを持ち、私はおそろおそろ機雷に近寄っていった。

機雷の下部にぶら下がっているクサリの先端に、私はチビ介のク

サリを結びつけた。私に気づいて、小魚たちはとつくに姿を消していた。チビ介のところへ戻り、その背中に乗り、私はゆっくりと機雷をけん引させはじめた。海流に逆らって、航路から少しでも離れたところへ移動させようとしたのだ。

そのあと機雷をどうするかなど、何か考えがあったわけではない。だがとにかく、航路を行く船を撃沈してしまうことだけはさげようと思った。

機雷は重く、なかなか動かなかった。だがチビ介が何回か水をけると、ゆっくりと移動を始めた。潜水服を捨てたのは、チビ介にかける負担を少しでも減らすためだった。おかげで私は水中で呼吸することができなくなってしまったが、やむをえなかった。私の緊張が伝染したのかもしれない。チビ介も神妙な顔で、機雷を引いていた。

そのまま一時間以上けん引を続けたが、正直に言うと、私は頭をかかえていた。これで航路から引き離すことはできたわけだが、このまま陸地まで引き続ける体力はチビ介にもないだろう。かといって、機雷を処理する方法もない。

チビ介をできるだけ浅く泳がせ、私は背中に乗り、空を見上げ続けた。太陽はすっかり高くなり、じりじりと照りつけてくる。手をかざして日差しをさえぎりながら、私は見回し続けた。そして、とうとう見つけることができた。

エンジンが一つしかない小型のものだったが、飛行機には違いなかった。私は身を乗り出し、両手を大きく振った。

はじめは遠く、小さくしか見えなかったので、気づいているのか

いないのかも、なかなか判断がつかなかった。だがついに高度を下
げ、旋回を始めたときにはうれしくて、思わずチビ介の背中をぼん
とたたいた。

近寄つてくると、空軍の飛行機だとわかった。小型の偵察機だ。
幸運だったのは、細長いバナナのような形をした浮きをつけた水上
飛行機だったことだ。水の上にも着陸することができる。

水上飛行機がいったん遠ざかったので、あれあれと思っていたの
だが、すぐにUターンして戻ってきて、着水態勢に入った。高度を
下げ、水しぶきを上げて浮きをぬらした。だいぶ通り過ぎていつて
しまったが、まるでアメンボのような格好で速度をうんと落とし、
こちらへむかって水の上を滑ってきた。

50メートルほどのところでエンジンを止めたので、チビ介の背
中から飛び降り、私は泳いでいった。そばへ行って浮きにつかま
ると、ドアが開いてパイロットが姿を見せた。

こんなに小さな飛行機にどうやって乗り込んだのだらうと思える
ような大男で、口のまわりにはタワシのように濃いヒゲが生えてい
る。半そでのシャツを着て、毛だらけの腕を見せている。そのかわ
り髪の毛は薄い。

「おまえは誰だ？」男は言った。

「海軍の竜騎兵よ」

私は事情を説明した。機雷という言葉聞いて、男はぎよつとし
た顔をしたが、円を描いてゆっくりと泳ぎ続けているチビ介の背後、
15メートルほどのところで波間にわずかに顔を見せているものを

目にして、納得したのだろう。すぐに表情を変えた。

「それで、オレにどうしてほしいんだ？」

「海軍の司令部に連絡してほしいの。あの機雷を何とか始末しないといけないわ」

ヒゲの先を指で引っ張りながら、男は少しの間考えていたが、やがて答えた。

「ああ、そうだな」

「この飛行機にも無線機はあるんでしょう？」

男はマイクロフォンを手にし、ヘッドフォンを耳にあてた。

「竜騎兵、おまえの名はなんというんだ？」

「竜騎兵訓練校4年、ジャネット・スミス」

無線機のスイッチを入れ、男は司令部と話し始めた。やがてスイッチを切り、私のほうを向いた。

「竜騎兵、おまえは死んだはずだと司令部は言ってたぞ」

「冗談じゃないわ。このとおりピンピンしてるわよ」

「そのようだな。それで機雷だが、司令部のお偉方えらがたは、オレとおまえで何とかしろとおおせだ。海底火山のことで手いっぱい、機雷なんぞにかかわる余裕はないとさ」

「噴火で大きな被害が出たの？」

「いいや」男は首を横に振った。「津波は起こらなかった。せいぜい火山灰が降って、洗濯物が汚れたくらいだな。だが念のため、湾内全域に警戒警報が出ている。だからオレもパトロールに出されたんだ」

「そう」私は少し安心した。「でも、あの機雷はどうするの？」

「でかいのか？」

「大型よ。戦艦にだって穴を開けることができるわ」

「それはすごいな。クサリをはずして、おまえとクジラは離れている。安全な距離だけ離れたら、手を振って合図をくれ」

「どうするの？」

「まあ見てろって」

男はドアを閉め、飛行機のエンジンを始動させた。黒い排気ガスが噴き出し、プロペラが回転を始めた。私は水に飛び込み、チビ介のところへ戻った。

飛行機はすぐに離陸した。クサリを切り離し、ゆっくりと泳がせながら、チビ介の背中に乗って私は眺めていた。

このときになって、飛行機には小型の機関銃が装備されていることにやっと気がついた。ここから見るとミツバチの針のように細いものでしかないが、操縦席の下からぐいと突き出しているのだ。

やがて十分な距離をとることができたので、伸び上がって、私は手を振った。了解のしるしに飛行機は翼を少し振り、返事を送ってきた。

機体を斜めにしてゆっくりと旋回を始めながら、飛行機は機雷に近寄っていった。機首を下げ、ねらいを定めているようだ。

引き金が引かれても、タタタと意外なほど小さな音がただけだった。それでも水面にはいくつもしづきが上がり、一列になって機雷へ近寄っていくのが見えた。

命中したように見えたが、一瞬の間は何も起こらず、失敗だったかという気がした。だが爆発が起こったのは、そのときのことだった。

音やしづきよりももっと強烈だったのは、その閃光せんこうだった。水中で強力なフラッシュでもたいた感じた。

音は少し遅れてやってきて、海全体がズンと揺れたような気がした。爆発音には慣れているはずのチビ介もビクリとふるえたほどだ。私はすぐに水に飛び込み、顔を見せて、目の下をなでて落ち着かせた。私の耳にも、水中ではじけ続ける泡の音はまだ聞こえていた。

しかしこれで、機雷の処理はすんだわけだった。私は飛行機の姿を探した。もう一度ぐるりと旋回して、こちらへ戻ってくるのが見えた。

あの飛行機には拡声器も積まれていたらしい。割れてガラガラしていたが、パイロットの声が聞こえてきた。

「竜騎兵、おまえはゆっくりと基地へ帰れ。あせることはない。司令部に連絡して、むかえの船を呼んでやるよ」

わかったというしるしに、私はもう一度手を大きく振った。進路を変え、飛行機は南の空へ姿を消した。

ほっと息をつき、私はチビ介のベルトにつかまりなおした。西へまっすぐに進むように指示を出した。

(終)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645d/>

湾の竜騎兵

2008年8月13日20時24分発行